
文字使い

ビックボスリョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

文字使い

【Nコード】

N1108Q

【作者名】

ビックボスリヨウ

【あらすじ】

平凡な中学生生活を送る
中学生一年生の“波風悠斗”（なみかぜ はると）
は、ある日郵便ポストに
自分宛てに手紙が届いてることに気付く。
そして悠斗は、
優秀な筆使いになるため
の冒険が始まる――

筆使い（前書き）

初めての小説なので、
まだ文章が幼いところもありますが、
よろしく願います。

筆使い

―は区切れのマーク

「は主人公の台詞

」は他の人の台詞。状況によって変わる

この物語はフィクションです。
しかし、この物語を実際に在ったと信じるか信じないかはあなた次第です

第一章 「第一試験」

ガタンッ！！

僕はその音で目を覚ました。

小学校を卒業した時に貰った電波時計が示した時間は、午前7時12分だった。

僕の名前は“波風 悠斗”（なみかぜ はると）

平凡な中学一年生だ。

中学校名は“桜中学校”

去年小学校を卒業し、まだあまり慣れていない中学校生活を送っている。

眠い目を擦りながら、

郵便ポストに何がきたのかを確かめに外へ出る。

冷たい風が容赦なく

パジャマ姿の薄着の僕に

吹き付ける。

「今日も寒いな〜」

誰に言うわけでもなく、

一人でボソツと呟いてしまった。

ようやく郵便ポストにたどり着き、ポストの中身を確認する。

そこには、一通の手紙と

何か膨らんでいる物が一緒に入っていた。

宛先を見ると、自分宛てになっている。

誰からかな？と疑問に思い、差出人を確認するが、どこにも書いていない

とりあえず、ここでは寒いので、家の中で中身を確認することにした。

家の中に入り、暖房を付ける。勿論、設定温度は27度。一段落着くと、早速手紙の封を切る。

同封されていた物は、

筆の様だ。

手紙を見ると、達筆な字でこう書いてあった。

波風 悠斗様

あなたは今回の“文字使い”テストの参加者に選ばれました。

今日は通知をしにきました。

テスト内容や場所、時刻は後日お伝え致します。

e'niguma∞

最後のほうに、人間の頭蓋骨の様な物がかいてあった。少し、変な感じがした。

それと、少し内容が理解できない。

いや、少しどころか全く理解が出来ない。
文字使い？

何の事だろう？

もしかして新卒の高校の

募集とか……？

いやいや、あまりにも不自然だろ……

……
とりあえず、母さんに相談してみよう……。

僕は、母さんがいるキッチンに行き、手紙の事と
その内容を話した。

『今は夕飯作りで忙しいんだけど……』

全部話したが、母さんも

何にもわからないらしい

……。

僕はあの手紙のマークが気になり、手紙のマークをもう一度よくみ
た。

そうか！！

あの変なマークの違和感はこれか！！

あれは人の頭蓋骨のあごの骨を左右逆に入れ替えたんだ！

一人で納得していると、

母さんがその手紙を後ろから覗き込んだ。

『エニグマっ！！！！』

母が急に驚いたので、

僕もびつくりしてしまった。

母は動揺を隠しきれない、という表情をしている

「か、母さん？」

僕が声をかけると、

はっ、と我に戻り、

母は僕をしばらく心配そうに見つめると、

『悠斗。今はまだ詳しく言えないけどね、あなたには不思議な力が

あるの。』

『エニグマに選ばれた以上、テストには強制的に参加しなければいけないの……。』

『必ず、テストを無事クリアして帰ってきて』

母はそれだけ言うつと、

また夕飯作りに戻ってしまった。

その日の夕飯は喉を通らなかった。

翌日

昨日は全然眠れなかった

母があんなに動揺するところは初めてみたからだ
ベットから出ると、

昨日の手紙と筆の方に自然に目がいった。

筆を手に取り、なんとなく筆を空中で動かしてみた。

すると、不思議な事に

空中に線の様な物が書けたのだ。

試しに、すぐそこにあったブタの貯金箱に“動”

という文字を書いてみた

すると、その文字はしばらく空中を浮遊したあと

ブタの貯金箱にくっついた。

途端、ブタの貯金箱が動き出した。

驚きながらも、母の言っていた“不思議な力”とはこのことだろうか……？

しかし、今初めて使った

この“力”を、母は何故知っていたのだろうか？

とりあえず、このブタの貯金箱を止めることにした。

“動”で動き出したのだから……！！

僕は空中に“止”の文字を書いた。

すると、また文字はしばらく空中を浮遊したあと、ブタの貯金箱にくっついた。

すると、ブタの貯金箱はその場で止まった。

僕は、目の前の光景が信じられなかった。

試しに他の物も試そうとすると、

ガタンッ！！

という音がした。

郵便ポストにお届け物が入った様だ。

僕は机の上に筆を置き、

また郵便ポストへ向かった。

――外は相変わらず肌寒く、

コートを来ていても我慢出来ないほどだった。

郵便ポストを見ると、

また宛先は自分宛てだった。

しかし今回は、少し大きめな小包だった。

家の中へ入り、自分の部屋に戻り、封を開ける。

すると、“文字使い生徒手帳”と書いてあり、中には手紙が入っていた。

手紙の内容は、達筆な字でこんな事が書いてあった。

波風 悠斗様

おめでとうございます！

見事才能を開花させましたね！！

生徒手帳が発行されましたので、同封致します

必ず読んで下さい。

テストの日程と時刻が決定致しましたので報告致します。

日程 今年2006年

6月12日

月曜日

時刻 午後6時12分

以上です

指定した時刻にお迎えにあがりますので、家で待機してして下さい。

同封されていた

生徒手帳を開いて見ると

見開きのページに書いてあったのが、

“筆使い基準12事項”

というものだった。

内容は、こういうものだった

その一、この基準事項は

筆使いのための

安全に使用する

ための事項であ

る

その二、筆使いは人々の

平和と安全を守

のである。

るためにあるも

その三、その二にある様

に、この才能を

自分のためだけ

に使用すること

を禁ずる

その四、“死”や“苦”

“狂”などの文

字を人に使用する

ることを禁

ずる

その五、その四にある様

に、文字使いは

人に危害を加え

ることを禁ずる

その六、その四にある様

に、人への使用

は禁止だが、現

えない悲惨な状

状を認めざるお
況の場合は、特

例として解禁す

る

その七、“時”の様な時

間を止めること

を禁ずる

例外はなしとす

る

その八、通常、禁止され

ている文字を各

担任の先生の確

認がとれない場

合は、特例とし

て解禁する

その九、生徒は各担任の

先生の指示を受

けたら即座に指

示通りに行動す

る

その十、その九の通り、

生徒は即座に行

動する

もし反抗したり

反対した生徒は

罰則を与える

その十一、この生徒手帳

を本人以外の

第三者に公開

することを

禁ずる

その十二、生徒は常に健

康でいること

生徒はなるべく

く風をひくこ

とのないよう

最善の努力を

すること

と書いてあった。

生徒手帳って……もう第三者に公開しちゃってるし……。

もう一度手紙を見直すと

日程の方に目があった。

6月12日……

来週の月曜日か……

母さんが言ってた通りに

強制的参加なんだな……

『お迎えにあがります』

ってただ理不尽なんだよ……

“才能を開花”って、

まるで知っていた様な感じだな……。

しかも、たった今わかった自分の才能なのに、

タイミングがぴったり過ぎる。

―見られてるのか？

どこからだ？

僕は急に怖くなってきた

エニグマの存在の裏には

何かとても恐ろしいものが隠れている気がする。

そのあと、僕はどんな事が出来るか、能力を試してみた。

わかった事は、頭の中で文字をイメージしてから

文字を書かないと、失敗するということだ。

実際、ブタの貯金箱に

“動”という字を書いたとき、頭の中で、夕飯の事を考えてたら、文字さえ出て来やしなかった。

それからの一週間、僕は

ずっと練習をしていた。

そして、ついに『月曜日』がやって来た。

2006年6月12日

――午後6時11分――

時間まであと少し……

カチ カチ カチ カチ カチ カチ カチ カチ

時計の動く音が、この時は凄く鮮明に聞こえてくる……。

あと10秒……

カチ カチ カチ カチ カチ

あと5秒……

カチ カチ カチ カチ カチ

0……

6時12分になった……

.....

数秒間、沈黙が続いた。

『こんにちわ

波風悠斗君!!』

「……っ!？」

不意にどこからか声がした。

その声の主を探すか、

声の主を探す事は出来なかった。

「誰だ!？」

思わずその言葉を発してしまった。

『無理無理!!』

お前は俺を見つけれないヨ!!』

なんか耳の中へキンキンした声が響く。

僕は何も言えなかった。

相手の正体がわからない以上、下手に相手を刺激しないほうがいいと

思ったからだ。

『けひひ!!』

何も言えずに黙っちゃったヨ!!

まあいい、お前が拒否ろうと、参加は強制的だ。ま、せいぜい死な

ない様にがんばりナ!!』

そう言い、パチン、と

いう音がした途端、

僕は意識が遠くなるのを感じた。

—ここは、どこだ？

どれくらい時間がたったかわからない。

気付けば、僕は薄暗い、

自分の通っている中学校の体育館に倒れていた。

『目が覚めた力?』

意識がまだ朦朧としているなか、聞いたことのあるキンキン声が響いた。

『お前をここに連れて来たのは、他でもない、この俺だ。そして、今からテストの内容を説明してやる。感謝しろ。』

他の受験者はいないのかな？

『まず、この学校には三つのパスワードがそれぞれ散らばっている。その中から、一つでいいから、そのパスワードをみつけろ。』

みつけたパスワードを、屋上に行くための扉に、そのパスワードを入力するだけだ。

制限時間は72時間

三日だ。

ただし、廊下には鬼影デーモン・シャドウが巡回してるから、せいぜい捕まんない様に気をつけな。』

三日で三つ。鬼影って何だ？

そう考えていると、急に校内放送が入った。

『学校に大きな荷物が届きました。繰り返します。』

学校に大きな荷物が届きました。』

……！！

―どこの学校にも、もし不審者や変質者が侵入してきたときに、その不審者や変質者を刺激しない様に生徒や先生にそのことを知らせる必要がある

それが“暗号放送”である。―

うちの暗号放送は……

いま放送された

『学校に大きな荷物が届きました。』

繰り返します。

学校に大きな荷物が届きました。』だ。

僕はとりあえず、パスワードを探すことにした。

体育館を一通り探したが

見つからなかった。

僕は体育館を出ることにした。

僕の学校は、“西校舎”と“東校舎”に分かれており、体育館にいくためには“西校舎”から

渡り廊下を歩いていく必要がある。

“西校舎”と“東校舎”

を唯一結んでいるのが、2階から2階へと渡れる渡り廊下だけである。

僕は西校舎へ行くための渡り廊下を歩いていた。

すると、廊下の隅に何か紙が落ちている。

拾い上げて、見てみると

そこにはこう書かれていた。

パスワードNo.1

“ 6月12日 ”

早速パスワードらしき物を見つけた。

パスワードは……“ 6月12日 ”だ！！

僕は結構簡単にパスワードが手に入って拍子抜けしてしまった。

これで、あとは屋上に行くだけだ。

僕は階段を上がりはじめた。

屋上に行くための階段を。

―悠斗は気づいてなかった
背後から異様な殺気を放つ者がいることを。
まだ追いついてはいないが、その者は着実に悠斗との距離を縮めていた。

悠斗は階段を上り、
ついに屋上の階段にたどり着いた。
階段を上ろうとすると、
ゾゾゾゾゾゾゾツという音がし、振り返る。
しかし、音の正体を見付けることができなかった
屋上の階段を急いで上り
屋上についた。

屋上のドアの近くに、何か入力型のパスワード型があった。

“ 6月12日 ”

カチ、カチ、カチ、カチ、カチ、カチ、カチ。
パスワードを入力した。

キィィ 古びた金属音がし、屋上の扉が開いた。

やっと……帰れる……

ほっ、と安心した。

ガツツシャアン!!

刹那、後ろのドアが轟音と共に木っ端みじんになった。

すなけむりの間から現れたのは……

鬼の様な角が二本頭から
生えた自分そっくりの

“ 影 ” だった。

おそらく、身長も同じぐらいであろう。

これが“ 鬼影 ” だろうか……？

一瞬だった。鬼影はその

小柄な体型からは考えられない素早さで、僕との間合いを攻めていた。

とつさに身を引こうとするが、恐怖と驚きで体が動かない。
―やられる。

僕は死を覚悟した。

こんなところで……。

僕は体の中に、ふつふつと沸き上がるものを感じた。

こんなところで……。

こんなところで……。

死んでたまるか――！

考えるよりも先に行動していた。

自分自信惚れ惚れするような俊敏な動きで
筆を取り出し、大きく空中に書いた。

“ 止 ”

……っ――！

鬼影はまだ抗おうとしている。

すると、その静寂を破る様に、キンキン声が響いた。

『試験合格ダ――！』

波風悠斗――！』

何故ここにアイツがいるのかわからないが、
とりあえず試験合格を伝えにきたようだ。

『お前はこれから正式な筆使いダ――！』

あれ？これって第一試験じゃなかったっけ？

「これって第一試験なんじゃ……」

そう言くと、ウィルは思い出した様にこう言った

『ああ、今ちよつと急用で、筆使いを大量に募集しているんだ。
だから、第一試験を通過した者は強制的に筆使い就任。』

こうして僕は、

“ 筆使い ” になった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1108q/>

文字使い

2011年1月16日06時46分発行